

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 334



1999 SEPTEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2000年H A J サマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク (7,027m)

スパンティークは、チョゴルンマ氷河の源頭に位置する名峰である。南には、マルビティンやハラモシュ、北にグレート・カラコルムの山々を望むことが出来る。カラコルムの展望台でもある。

H A Jでは、サマー・キャンプの新舞台としてパキスタンを選んだ。その第一歩としてスパンティークにて開催する。

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題があるが、情報の収集や強力なスタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたい。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みに協力をお願いしたい。

記

1. 期間：2000年7月14日(金)～8月28日(日)
2. 募集人員：10名程度

3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：10月31日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。



▲左の稜が南東稜

表紙写真

バトゥーラ氷河源頭 (バトゥーラ主稜線から)

カラコルム、バトゥーラの主稜線は高度をさげながら西に向いバトゥーラ氷河の源頭に至っている。カラコルムの西端に位置するバトゥーラ氷河の源頭にはカンピレディオール (7,168m)、クックサール (6,943m) が聳えている。アプローチが長く不遇な地域である。

(記：伊東 満)

ヒマラヤ No.334

1. PEOPLE GUPTA BAHADUR RAMA
2. ネパール測量局と地図製作 ディパック・シャルマ・ダハール
5. 竜王 - 中国領カラコルムへの挑戦 ハッグ・マクマナーズ
11. ヒマラヤ・ニュース <地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから>
14. 西藏登山の和文参考資料一覧
24. 寸感・事務局日誌

PEOPLE

「ネパール警察登山探険財団（NPMAF）」とは、あまり聞き慣れない名前であるが、カトマンズに本部を置くNPMAFは、この10年の間に1991年チェオー・ヒマール(6,820m)伊万里山岳会
1994年ギャジカン (7,038m)信州大学
1995年ギミゲラ・チュリ (7,350m)東京農業大学
1996年ラトナチュリ (7,035m)信州大学
以上のように日本隊4隊と合同登山を組み、ことごとく成功しているのである。ネパール・ヒマラヤ登山の合同先としては、絶好の組織といえる。

此の度、NPMAFの創立から深く関わり、中心的な役割を果しているグプタ・バハドゥール・ラナ氏が部下のジョシ氏と共に、信州大学の招待で来日された。

ラナ氏は、1940年生まれの58歳。西ネパールのセンザ・ディストリック、ダブン村出身。1960年インドのグルカ・ミリタリハイヤー・セカンドスクールを卒業。インドのミリタリ・エンジニアリング・サービスで1年半事務職として勤める。その後チトワンの小学校の先生を半年経験した。

警察に入ってから、ほとんどカトマンズ暮らし、奥様と11歳から24歳まで男3人・女2人の子供がいる。

警察では、登山隊の連絡官として日本隊を含めて同行している。又、ダーズリンで岩登りのトレーニングも受けており、その方面の素質も高かったと云う。

ラトナチュリ登山が終了し下山のキャラバンでは、ナル・コーラからの脱出でトラブルが発生し、ラナ氏も頬がこけるほどの心痛に見舞われたらしい。

そもそもこの財団ができたのは、警察の仕事としては国民の安全確保が重要な任務である。しかし、村人らが山で遭難しても、警察で救助できないことがあった。そのような現実を改善すべく、ラナ氏と1984年秋エヴェレストで遭難したヨゲンドラ・タパ氏（ちなみにラナ氏の妹さんがタパ氏の奥様である）が警察長官に進言して1976年に財団が創立された。設立当初には、チャンガバンを



登ったグループ・ド・コルテの会田雅英氏らから2～3週間登山技術の指導を受けたと懐かしげに語った。早くもその年の秋には、警察隊としてツクチェ・ピークの登頂に成功した。

日本の登山者に対しては、登山にはトラブル、遭難がつきものなので、単に登る技術だけではなく、様々な情報を提供して欲しいと語った。

財団と合同登山を希望する場合は、下記宛直接連絡する。

Nepal Police Mountaineering Adventure Foundation

Police Akademy.Maharajagunj Kathmandu, Nepal.

Tel. 411675, 270647

P.O.Box No.8829

★主な登山経歴

- 78年 ガネッシュ・ヒマールIV [バビル] (7,052 m) 日本勤労者山岳連盟隊と合同初登頂
- 91年 チェオー・ヒマール 伊万里山岳会隊と合同初登頂
- 94年 ギャジカン 信州大学隊と合同初登頂
- 95年 ギミゲラ・チュリ 東京農業大学隊と合同登頂
- 96年 ラトナチュリ 信州大学隊と合同初登頂

グプタ・バハドゥール・ラナ

1940年生まれ

ネパール測量局と地図製作

ネパール測量局

ディパック・シャルマ・ダハール

■サーベイ・デパートメント

サーベイ・デパートメントには、4つのセクションがあります。ジオデティック・サーベイ・ブランチは測地部です。カダストラル・サーベイ・ブランチは地籍部です。サーベイ・トレーニングセンター。そしてトポグラフィカル・サーベイ・ブランチは地形測量局です。

サーベイ・デパートメントの9つの内容は、

- 1) 測量原点のネットワークを確立する。
- 2) 国内の所有権の把握。
- 3) 地形図のベース・マップの作成。
- 4) 資源管理図の作成。
- 5) デジタル・データの総合的コンパイル。
- 6) 人材の育成。
- 7) 国境の確定。
- 8) 土地の利用・開発状況の記録。
- 9) 地図の作成。

■測地部

測地部は、日本で云う国土地理院のやっている測地部の仕事プラス標準時を決定したりします。GPSを使用した測地。正確な時間のサービス。測量原点の計測や設置。

■地籍部

地籍部は、戸籍の決定。GPSステーションの維持管理。重力の探査。ジオイドの構築。地殻変動。地震の予知。測量道具の調整。

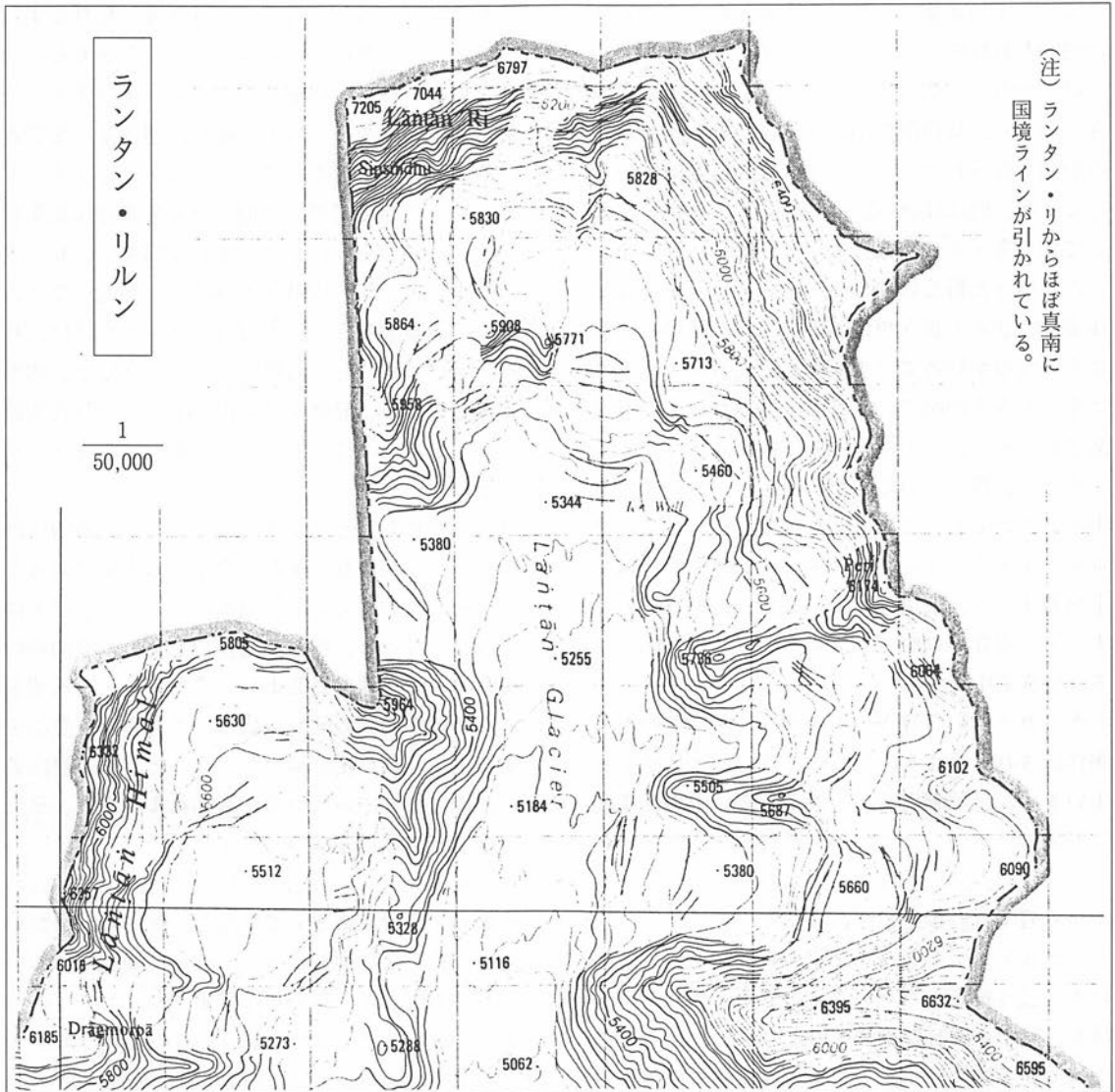
サーベイ・デパートメントは、オーナーシップのサーフィケートという土地の所有権、要するに登記書なども発行する仕事や、土地開発計画、改良計画、日本の農業委員会の土地改良部がやっているような仕事もやっています。これに対して、ローカル・ガバメントでは、土地の生産性を確定する事や、様々な土地に関する情報収集をやっ

いて、この件については中央政府はほとんどタッチしていません。例えば土地の情報収集関係では、ネパール全土を対象にカダストラル・サーベイという仕事をやっており、既に74のディストリックについて完了。その内の38のディストリックについては、地方ごとの測量図にもとずいて地図ができています。

トレーニング・センターの部局は、いろいろなレベルの測量技術者を育成するために、1968年以降4つの目的で活動している。1) シニア(上級)のサーベイ・コースは、日本で言うと大学の地理学科を卒業したレベルの人を対象に16ヶ月間の特別トレーニングを行う。2) ジュニアのサーベイ・コースは、もう一段低い通常の調査官ですが、日本で言う高校卒業程度で数学を専攻していた人が中心で、12ヶ月間トレーニングを行う。3) ベーシックのサーベイ・コースは、日本で言うと高校1~2年程度で受けられる国家試験で「S. L. C」と言う数学で合格した人が、一番基礎的な低いレベルのトレーニングを12ヶ月間行う。4番目の資格を与えるためのディプロマ・コースについては現在検討中です。

■地形測量局

私の所属しているのは、「トポグラフィック・サーベイ・ブランチ」で地形測量が仕事です。実際に地図を作るのが仕事です。具体的には、地形図、行政管轄図、テーマ別の図(地質図、土壤図など)を作ります。また、都市部の大きなスケールの物、地方の特別な地図、土地利用図、また、いろいろなレポート、地下資源図なども作っています。そして、この部署では、地図を作成するための印刷所も持っていますし、他部局の地図プロジェクトに対する空中写真を提供する仕事もやっ



ています。

実際のところ地図サービスについては、これまで必ずしもキチンとやっていなかったが、これからはそれらのサービスも整備されるし、現実に新しい地図を皆さんに提供するのこここの仕事になると思います。

一番初めのネパールの地図は、1950年から60年にインド政府によって作られた1インチ1マイルの地図で266シートですが、極秘扱いだったため入手することが困難で、イリーガルにコピーするしかなかった訳です。それが新しい地図では、2万5千分の一と山岳部については、5万分の一で作るようになりました。

今の2万5千分の一の地図は、トライプレーン

とミドルマウンテン、レッサーヒマラヤ或いは、ミッドランドと呼ばれる所での作業であって、一方、5万分の一の地図は、高ヒマラヤ所謂ヒマラヤ山脈での作業です。

この内の低い所での2万5千分の一の作図作業でいいますと、ルンビニ・ゾーン丁度中央ネパールの所なのですが、そこではJAIKAや日本政府のODAによって、2万5千分の一の地図全てが既に完了しています。81枚のシートに分かれています。コンターも10メートル間隔で書かれています。

今のJAIKAの援助によって完了したルンビニ以外では、フィンランドのODAで作られた地形図が、主に東ネパールの方で作られています。2万5千分の一の地図が既に255枚のシートとし

て完了しています。それから5万分の一の山岳部の地図も37枚のシートとして完了しています。

以上のものに加えまして、フィンランドのODAによって、北西部の山岳地帯の2万5千分の一の地図も作られつつあります。全部で268枚の予定ですが、既に150枚以上が完了しています。そして全て完了するのは、今年(1999)12月です。

こういった新しい地図のベース・マップの作成作業は、JAIKAや日本のODAの援助で89年に入ったのが初めてです。そして9万7千平方キロを2万5千地図で、1万9千平方キロを5万地図でカバーし、この作業が99年内に完了します。

そして、残っているのが、西ネパールの4万2千平方キロです。ここに関しては、GPSでのグローバル・ポジショニング・システムでの測定の全情報ネット、航空写真での撮影は終了しております。現在それをプランニングして、地図として作成作業中です。

次にカナダのODAによって、テーマ別の地図が作成されています。これは、1980年代に始まっています。土地利用図、土地系統図、土地生産図、気候図、気象図の5つのマップがあります。これらの解説書も発行されていますが、80年代の物ですから若干改訂の必要があります。

デラルト・ポトグラフィックマップと云うのは、日本で云う編集図みたいなものです。各地方自治体が、国土地理院の地図をもとにして、いろいろ作っている地図です。それは当然実際に使用する方を想定して英語版とネパール語版がそれぞれの縮尺で出ています。

現在ネパールで一番最初に作るのは、航空写真です。エア・フォルトグラフで、その中から地上の目印になる点をプロットしていくという作業を行います。航空写真の中で選んだ目印になる点のGPSでの観測を行って、経緯度・標高に関して測量します。次に実際にそれを測量する訳です。それから航空写真から地図を作る作業のプロセッシングを始めます。少し専門的になりますが、実際に地図を作る時に、立体視するような航空写真をもとにして、そこから自動的にコンターの形で書いて行く装置がありまして、それをコンピューターを使っているいろいろプロセッシングをして、写

真から地図に移し替えるという作業になります。

その上で実際にフィールド・ワークをもとにして、いろいろな情報をその中に書き込みます。ですからその時点で、地名、道路、建物などを書き込みます。これでドラフトの地図ができます。それをもとにして実際に現地に行って確認作業を行い、ゲラ刷りを作ります。地名の間違い、ピークの間違ひは、この段階で入り込んだ間違ひです。

その後製図をきちっと行ってマークを付けたり記号を付けたりし、最終的にチェックして、測地審議会の中で、最終承認を得た上で、ODA関連で作業したものは、引き渡しがあって販売ということになります。

(近藤)私もカトマンズで販売されている何枚か買ったことがあります。登山者の立場で言ってもちょっと使いにくい。国境線の向こう側、例えば中国側になると、空白になってしまう。登山者の場合は、国境線を登ると言うことが多い。希望を述べれば中国側の地形も描写してもらえば登山をする上で非常に使い易いと言うことです。登山者のために作っていないのかも知れませんが、そういうことは不可能なのでしょう。

D) 残念ながら政治的にそれは不可能です。他の所からご自分で調達してなんとか作って戴きたい。(近藤)例えば中国製のシシャパンマの地図には、ネパール側も入っているんですね。

D) 不可能です。JAIKAが作ったルンビニ・ゾーンの地図で、インド側に400m範囲だけコンターが入った例がありますが、インド政府から許可を得たそうです。外国の許可がない限り不可能だということです。多分、中国側のコンターが入っていないということは、中国政府の許可を得られない限り、コンターを入れられないということではないかと思います。

(要旨責任：山森欣一)

[サーベイ・デパートメントは、国土庁に所属し、職員2,900人、技術系職員は2,140人]

研究会は、1999年2月20日八王子の大学セミナーハウスで行われた。通訳は吉田充夫氏。

竜王 — 中国領カラコルムへの挑戦(1)

ハッグ・マクマナーズ

■アプローチ

午後の日差しは強かった。曲線的な漂石土で形成されている平坦な谷床、その熱気のコもったもやの中で玉石がかすかな光を南方に放っている。5,710mの無名峰が下方の山々を脅かすかの様にそそり立っていた。

何かかもやの中に浮かび上がり、我々の方へゆっくり近付いてきた。影はやがて、ラクダ工の乗った一頭のラクダの形を成し、着々と、リズムカルに意志を持った足取りで進んでくる。さらに距離が縮まると1頭が複数になり、それぞれのラクダ工達に操られながら先頭の歩調に合わせて行進しているのだった。最初は24頭編成の我々のキャラバンかと思ったが、数はそれ以上だった。そして、色あせた衣服を着た12名の人が、崖沿いのもろい岩肌の道を慎重に歩いていた。

その一団の姿がついにもやの中から抜け出た時それがクラウン峰登山から帰って来た日本隊である事が分かった。

キャラバン隊の中には、我々が荷上げに使ったラクダ、ラクダ工、そしてロバもいた。二心あるCMAは、ラクダが空身になったら飼主の元へ戻す様我々に命じていたが、すっかり日本隊の帰路キャラバンの方へ回していたのだ。勿論、日本隊からも荷送代が入るという訳だ。

彼らの姿が川沿のやぶの中へ入ると、非常に重大な問いが我々の心を脅かした。

「彼らは登頂したのだろうか？」

15分後、キャラバン隊はキャンプ・サイトで三々五々となり、荷をほどき始めた。我々は日本隊の隊長に声をかけ自己紹介した。日本隊側には、我々側の26頭よりも多い数のラクダがいたが、それは登山活動中の不測の事態に備えて、3ヵ月間ベース・キャンプに12頭確保していたからだ。我々にはその様な万全の予防措置を取る余裕が無かった。

つまり、何か起こった時はラクダが来るまで4週間待たなければならない事になる。

日本隊は往路の輸送に60頭のラクダを使い、しかも食料としての羊も連れて来たと言う。アギール峠で見かけた数頭のラクダの死骸は、彼らのキャラバンで使用したものだ。

これらの事実から、彼らは経済的余裕があり、しかもかなりの下調べをしているらしかった。隊長は品格のある中年の男性で、根っからの山男という感じだ。薬品会社を経営しているそうで、隊長自ら手当をラクダ工達に渡している。日本隊には映像カメラマン、スチール・カメラマン、作家その他の、ベース・キャンプ組もいた。登山活動の方は大学生位いの若さの、山に全情熱を注いでいるといった風のメンバー達が当たらしい。彼らがこう質問してきた。

「どなたが登攀メンバーなのですか。」全員だと答えたら驚いていた。

帰路であるにもかかわらず、日本隊の隊荷は山の様にあった。ラクダ1頭の借用料は£500。折りたたまれたダンボールを背負っているのもいた。ダンボールは、車道にたどり着いた時のリパック用だという。数台のアルミ梯子、大型の調理セット、テントの数々…そして、我々が持って来た以上の数のギアもあった。

隊長は2年前にクラウン峰の偵察を行ったそうで、その時かかった費用は、我々のこのささやかな隊の費用位であった。日本隊は極地法 金と物資の大量投入で攻めた事になる。が、果たして登頂はできたのだろうか？

日本隊の登攀メンバー達は、やせて憔悴していた。顔の日焼けはひどく、口唇はひび割れて鼻の頭はボロボロになっていた。彼らが取ったのは南東ルートだったが、7,070m付近で150mの岩壁帯にあるルンゼに行手を阻まれ、そこで登頂を断念

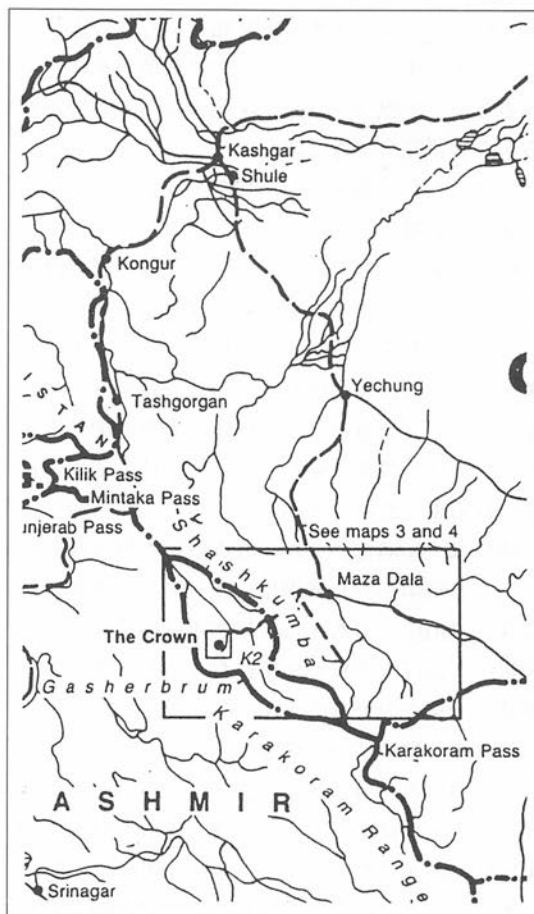
したとの事だった。「登頂できなかったが失望してはいない。あなた方の健闘を祈ります。」日本隊はそう激励してくれた。多分我々なら成功すると思えたのだろう。

我々の勝算を計る為に、敗退した日本隊の力量を推定しようとしてみた。ジョンは彼らが動揺していると見た。日本隊のひとりが「あなた方全員、とても強靱ですね」と言ったからだ。確かにこちらの全メンバーが日本隊員より背が高い上に、ガリガリのヘンリーを除けば筋骨もがっちりしている。ロボーは時に無敵のボディ・ビルダーといった体で、それでいて400m走の好記録も出せる男だ。

ヘンリーが何らかのメッセージをラクダ工に託しているはずだった。ちょっとした捜査活動の末、ラクダ工のひとりがポケットからボロボロのノート切れはしを2枚取り出した。

■先発隊からの情報

1. ベース・キャンプはスカムリ氷河から1 km 離れ



た「南岸」上に建設した。

2. ルートは日本隊と同じ南東稜で、彼らは7,070 m地点で敗退しているが、我々はうまくいくと思う。

3. アギール峠南西の第一大紅柳灘を出発したらシャクサガム河谷上部の南岸にルートを取る事。谷底から離れた所に迂回路が2本あり、濡れずに済む。目印にケルンを積んでおいた。

第一大紅柳灘の次のキャンプ地は、コル向うのBCまでの近道とは反対側の北岸上、オアシスの中だ。2つの谷の合流地点手前の最後のキャンプサイトになる。このルートは、谷の合流点から約2マイル西に向って登るトラバースルート（顕著）が出だしとなっている。我々のケルンからではなく、メインのガリーから入るように。

ローとジン・ジュンはK2のBC、スゲト・ジャンガルにいる。K2北氷河の雪解け流より約1マイル南方で、我々のいる谷の南岸上にある。

ローとジン・ジュンと話して、我々の無線機を回収して（彼らには要請してある）きてほしい。それから、BCまでの最後の数キロでは、サルポ・ラッコ氷河上の河で徒渉が出てくるので心得ておくように。

4. 君達がBC入りするまでには、我々はABCへ移動できていると思う。レーション、コンロ、燃料の一部はBCに残しておく。食事はコンロではなく、なるべく火を起こしてやってほしい。燃料節約の為だ。（トレッキング中に約1/3の燃料を使用した）

5. ABCまでの行程はボロボロガレの細かい上り下りが続く、ルートの説明書きと夜の交信予定をBCに置いておく。

6. BCには一両日宿泊するように。adaminの仕分けをすると共に休養を取る事。君達でABCに運んで欲しい隊荷—mindles（原文通り）、murduous（同）、ball acking（同）task—がある。君達用の2日分（36時間滞在分）の食料が箱1個に入っている。印が付いている。

7. 備品置場はBCの2キロ先だ。フィルム類や道具などはそこにある。そこを通る時、撮影機材を回収して持って来てくれ。ヒューのリクエストだ。

8. ヒュー・レフの撮影機材。余分な荷上げは極力

避けたい。BCからABCへの荷上げは平均して1人6回と踏んでいる。何人かは不運にもそれ以上になるかもしれないが。撮影プランを考慮しながら荷上げのプランを立てて欲しい。ABCまでは6回、それ以上も何回かの往復になるだろう。君達は早々に撮影機材が必要になると思う。その時は我々も手伝う。撮影をしない日はexped類の荷上げをしてもいい。

気付いた点その他あったら連絡してくれ。では、十分BCで骨休めを。 ヘンリー

■シャクスガムに行く

その日は夜8:30まで明るく暖かだった。我々は東西に走る谷の中にいた。そこでは日照時間が長かった。南北に流れるシャクスガム谷上部のじめじめした場所には有難い恵みだった。私は突然ある事に気付いた。この山への登攀欲が、写真から受けた悪い印象から私を辛うじて引き離していると。ヘンリーのメモを読めば登攀が相当困難である事は明らかなだった。全てがそうで無い事をそして、自分自身が恐怖感を抱いてしまう程のテクニカルな場所が出て来ない事を私は願った。

また、私自身他のメンバーと同等の荷上げをこなす必要がある事もヘンリーのメモから予想された。荷上げの合間を見計らって撮影をしなければならない。これは2つの仕事を同時にやっていくようなもので、相当な覚悟が必要だ。

しかし、アッパー・シャクスガムへ戻るまでの2日間は映画撮影を諦める事にしたら、幾分気が楽になった。皆のように余り深く思い悩まないようにする方が物事はうまく行く。ヘンリーは既に優先順位を決めている。荷上げが第一だと。私は決めた。心配するのはよそう。撮影は余裕がある時にやればい。

他のラクダ工達と再会し、むだ話に花を咲かせているうちに、イサックの様子がおかしくなった。彼はニックのカラフルな傘が欲しいとねだって、ニックにはっきりと断られていたが、その傘が無くなっていたのだ。ジョンはイサックに予備の雪眼鏡を貸していたが、これからの為にそれを返してもらい潮時だった。ところがそれも、イサックの布袋の中に消えていたのだ。彼は布袋をぶら下げながら我々がギア類をデポした辺りを歩き回り、

▼シャクスガムに行くラクダ (1992)



あわよくば手に入れようとしていた。

ジョンは、傘と雪眼鏡は取り戻すべきだと主張した。我々はイサックのラクダに付いているむち縄がボロボロになっているのを知っていたので、我々のものを取り戻した代わりにジョンがクライミング・ロープをイサックにプレゼントしてやった。イサックは感謝の意をこれっぽっちも表さずにそれを受け取ると、出来たてのナンを食べる為に仲間達の方へ行ってしまった。

夜がゆっくり訪れた。暖かな紫の夕焼けが、ギザギザの山々の後方に広がる群青色の空へ吸い込まれいく。山々には最後の光が辛うじて残っていた。“中国”の音楽が闇の中で響いてきた。私はサウンド・レコーダーを持って、誰なのかを調べる為にやぶの中へ入った。

ラクダ31頭のキャラバンがアギール峠方面からゆっくりとやって来る所だった。ラクダの首にベルが付いていてそのゆっくりとした歩調に合わせてリズムカルに鳴り響いていた。厚地の大外套をまとった中国軍将校達が列の後方でにぎやかに談笑している。キャラバンは我々の天場を通り過ぎ、オアシスの末端へ行った。

夜は快晴だった。頭上高くそびえる尖峰群の背後に無数の星がきらめいていた。ビバーク・バグの上で私は眠った(湿気と熱気による密室恐怖症を避ける為に。)朝早く目覚めた。丁度、アギール峠から朝日が昇って来る所だった。今日9月6日は日曜日なのだが、月曜日のようなものだ。我々は気分をふるい立たせるように仕事に打ちかかった。デポ品の入ったプラスチックドラムを重い石と木枝でおおい隠してから、混み合うオアシ

スを後にした。荷物は8ポンド以上だ。一頭のラクダが私の方に荒々しく唾液を吐いた。緑色のドロドロしたものが日避け帽にかかり、むき出しの肩にしたたりおちた。私はラクダの悪臭まみれになってしまった。

我々は、ぐらつく石におおわれた谷を着々と横切った。私はすぐにいつもの感覚を取り戻し、広い谷の乾いた部分に沿って、砂地や砂利を巧みに避けながら歩いた。先発隊が2週間前に残した踏み後をたどりながら、彼らがこの谷底から上方のもろい高台(曲りくねった激流の上部)に登ったポイントを探しに。

ヘンリーのパーティはルート上にケルンを残していた。不覚にも、先頭を歩いていた私は高台への最初の登り口を見落としてしまった。見上げるとそのルートは危険そうだった。一部崩壊の跡も見えた。そこで私はそのまま歩き続けながら他のルートを探す事にした。他のメンバーはケルンに沿って登っていった。私はニックに下降は十分気を付ける様怒鳴った。

ヘンリーのルートを取った彼らは何無く降りられたが、私の方は9フィートの崖下で行き詰まってしまった。ザックを吊り上げてもらうために(そうすれば身軽になって登れそうだった)ロープを下げてくれと叫んだ。イラついた表情のニックが崖っぷちから答えた。

「ケルンを見なかったのか?戻って迂回路を通して来いよ。」

さらに続けて、私が先に行った事、ニックとロボーがそうした時に私がずっと不機嫌だった事への不平を並らべ、ロープも投げないしとに角私を助け上げる気は無いと言った。何を言われているのかすぐに分からなかったが、間も無くある事を思い出した。2週間前、先を歩かれると撮影の邪魔になるからやめてくれと強く言っておいたのだ。

弁解しようとした時、ジョンが顔をのぞかせロープを放ってくれた。そしてラドと共に私のザックを引き上げてくれた。ビレーポイントが全く無いのでそこを登り上げる事はできそうになかった。私は急いで引き返し、彼らと同じルートをたどって10分後に高台の頂で合流した。

ビスケットやチョコを食べて休憩している時

にニックが仲直りのきっかけを作ってくれ、先程の気まずい思いは無くなった。この遠征がもっとよく見えてくるようになれば、何故誰かにイライラする事が生じるのか理解できるだろう。だが、我々は皆いざこざをうまく解決する術を知っていると思う。——そうである事を、少なくとも私は願った。

■チョコリ氷河出合へ

進み始めて再び登りとなった。今度は灰色の激流上に立つ壁のトラバースだった。そこでは谷の側面にもものすごい勢いで水流がぶつかっていた。この迂回路は先程のよりもずっとハードだった。グレード自体は中級位のトラバースだが、何しろ1マイルという長さで背負っている荷の重さまでトラバースを終えた時にはつま先もふくらはぎも前腕もクタクタになっていた。

午後2時半サルボ・ラッコ氷河谷に入る手前、鞍部のトラバース開始地点に到着した。(このショート・カットコースは1937年E・シプトンが通っている。)かなり歩いたり登ったりした後だったので全員疲れていた。500mの登り下りは1日分相当の運動量だと思われたので、我々は鞍部下方のガリー基部に泊まる事にした。洗濯したり体をふいたり食べたり日光浴したり、めいめいのんびり過ごした。

荷物軽減の為全ての書物をラクダの上に置いてきてしまった私は、気ばらしができない事にひどくがっかりしていた。が、ラドがWilbur Smithを貸してくれ、まるで初めてテレビを見た子供の様にそれをむさぼり読んだ。

突然強風が谷を通り抜け、重石で固定していた服や用具が飛ばされそうになった。読書を中断し、あちこちに散らばったズボンや寝袋の回収に走り回った。他のメンバーは谷沿いへ夕暮れの散歩に出かけていた。

この日は皆良くやったと思う。重い荷物を背に12キロの距離をからすの如くスムーズに進む事ができた。鞍部を今日中に越えて2日行程を1日にする事もできなくなかったが、3日分のレーションを持っていただけで、レーションを余らせて余計な重要を増やしたくなかったのだ。

以下は私の日記である。

「人をとりまとめる事程現実的で協力が必要な難しい事はない。遠征の第一歩となった今日、早くもこのような難作業に我々は直面したに違いない。」

アイガーで行った合同トレーニングでチームワークが培われるはずであったが、悪天の為に登る事ができなかった。緊張感の中で互いを見つめ合えなかったので、お互いの能力を心底尊重するまでに至らなかった。

私は高度順化が進んでいる事を感じた。背中に多少の痛みはあったが、軍隊での落下傘下降を嫌という程繰り返した経験の賜物だ。

高度の影響はそこにいる限りいつも直面する。激しい運動をするとすぐに呼吸が苦しくなり、胸が痛くなる。例えばとても寒い日に思いきり走ったりするとそのような症状を覚える。そのような時は少し休むといい。

登り坂になると全員疲れた。登る時は自分のペースでゆっくり歩かなければならない。そして息が苦しくなったら立ち止まる。これがコツだ。一定のリズムで歩くという基本を守りながら着実に高度を稼いでいき、谷をぬけると地平線が見えた。小山を登っている時はグラグラのモレーンの上での悪戦苦闘になった。体力を消耗し、活気的なリズムが狂ってしまった。

呼吸する事を忘れる、或は浅く呼吸をしてしまうのはいともた易いが、そうするとすぐにダメージを受けてしまう。常に口で深く呼吸するのを意識しなければならない。夜の間、私はまだ鼻で呼吸してしまいがちで、酸素を十分とり込む事ができなくなる。するとひどくリアルな窒息の夢を見てしまい、必ずパニック状態で目が覚めてしまった。最初のうちは、常に口で息をしていると喉が乾いてひりひりしていたが、徐々に慣れていった。

私は山で耐えねばならない残りの日数を相変わらず数えていた。不安な思いで朝早く目覚めれば、寝袋の外にはパリパリときしむ氷も無ければ冷たい風も無く、ただ新しい1日が明けただけの事だった。私は極力前向きに考える事にした。明日に、山に、そして来たるべき挑戦の機会に対峙して、何らかのひらめきを得るように努力した。選択の余地は無かった。唯一するべき事はできるだけ冷

静な状態を保ちながらこれからの困難にもちこたえる事だった。

1日も終わりに近づくと薄闇があい色の空に溶けこんでいく。鳥の群れは消え、谷の灰色の岩肌のシルエットがくっきりと浮かび上がる。太陽が山の端の向こうに落ちる頃、東方の空はピンク色に輝き出す。キャンプ・サイトの周辺は寂しさを覚えるほど静まり返る。風は止んで、心地良い暖かさと穏やかな静寂が残る。そんな時、眼前の山々を心ゆくまで眺める事ができた。

我々はとうとうカラコルム山系の最も高い地方まで来た。谷の屈曲点にはK2北面が望め、西方には、周囲の山々を圧するかの様にそびえ立つクラウン峰——世界最高峰の山々の一部に当る岩の突起——が見えた。

西方のぼんやりと灰色がかった空に囲まれていると、世界から我々だけ孤立してしまった様な気分になった。

翌早朝、太陽が谷のはるか向うから姿を現すと同時に星の輝きが薄れていった。「シプトン」版500mショート・カットコースの出だしは滝の岩場を縫うものだった。我々はゆっくり登っていった。

歩調は小さめに抑えて体を温めるよう努めた。体を動し過ぎて息が苦しくなる事のないようなペースを保った。いちいち息を切らしていたらその度に止まらざるを得なくなり、それは時間のロスにもつながり、登りが永遠に続く感じを受ける事になる。ルートは上方に向けて曲りくねっていた。時折、垂直（危険な垂壁）のスロープに6インチの足がかりといった場所も出て来た。

1時間に5分の休憩を入れた。幾つかのニセピークを越えた後、昼食時までに鞍部に到着する事ができた。期待していたクラウン峰の姿は見えなかった。まだ数マイル離れている。その代わり6,060mの無名峰、幾つかの峰、雲に巻かれた2つの小さい峰が見えた。

我々はなめらかで婉曲したガリー（干上がったゴルジュの中に落ちこんでいる）を下った。K2の方向つまり左方にトラバースをし、その次に連続的なもろい岩くずの急斜面を通り抜けなければならなかった。それは1000ft下の谷底に垂直に落

ちている崖の所まで続いていた。荷物を背負ったままでは無理そうだったので引き返す事にした。岩場の面はさんごの様にざらついていて、指や手のひらの皮がボロボロになってしまった。

少しずつ谷側に沿って南西方向にトラバースをした。そしてガレ場を急下降したが、暑い午後に土けむりまみれになるという散々な目に遭った。上方、谷側の彼方にK2の雄姿がはっきりと見えた。

進んで間も無くK2のふもとに20,000フィートのチョンタール山群が見えた。気分のいい面白そうな山々だ。サルボ・ラッコ谷は幅広の底に玉石がしきつめられており、南北に幾筋かの水流が走っているが、神々しい山容のムスターグ・タワー(7,280m)の方向(南方)に消えていく。

■インスガイティ氷河

北部K2氷河は灰色に濁った激流で急しゅんな谷合いを分かれながら通っていた。そしてせまいゴルジュの中へ流れこんでいた。ジン・ジュンと連絡官と合流する前に我々はこの冷たい激流を渡らなければならない。

谷底に降りてでこぼこの河原を水際まで進んだ。

▼チョゴリ氷河出合を徒渉する(1992)



川のそばに荷物を置いて徒渉できそうな場所を探した。私は喉がかわいていたので水筒の水を一気飲んだ。

最初の3度の徒渉区間は玉石の中州を目指すもので、当然冷たい水に浸されてしまった。足場の確保も難しかったが何とか為し遂げる事ができた。私の足全体は極度に冷えすぐにかじかんでしまった。青ざめた足の上を、氷片でできた小さな切り傷から出た血がしたり落ちていた。感覚が戻ってくる時はとても痛かった。

2000年H A J サマー・キャンプ隊員募集

3週間で登るヒマラヤ

H A Jでは、長い休暇のとれない方を対象として、成田を出発して登山を行い成田に帰着するまでの期間を「3週間程度」で済ませる登山隊を企画しています。概略は、往復に2週間、登山期間1週間程度です。当然対象山岳は「6千メートル級の山」となります。期間は、7月中旬～8月下旬の3週間です。具体的には中国、インドとなります。来年夏に休みをとれる方は早目にご連絡下さい。負担金は65万円程度です。

チョム・カンリ (7,048m)

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円

地域ニュース

《インド》

栃木隊、ストック・カンリ(6,153m)に登頂

グループ・ド・モネージュ隊(茂呂貞夫隊長ら8名)は、7月4日に糸川章、大内一成、樋口誠一、田口克実の4隊員が登頂に成功。5日にも隊長と大出隆、田中徹両隊員と連絡官が登頂した。

同隊は、外務省から渡航自粛勧告を受けたが、インド側との連絡によって訪印した。6月28日レー空港に到着したが、町の様子は平静で、近くで戦火を交えているとは思えない程であった。6月30日ストック村、7月1日モンカルモに入った。登頂後6日にレーに下山すると云うスピード登山だった。

同隊がIMFで聞いたところによると、今年カシミール側に登山を予定していた約60隊のうち、40隊が自主的に取止め、×ビザが下りなかったためとのこと。又、7月に入ってJ&K州全域に内務省からの×ビザが出なくなったとのことである。

(情報提供、同隊糸川章登攀隊長)

《中国》

未解禁地域の最新事情

中国登山協会から7月15日に入った情報。

「中国政府関係部門の規定によると」

- 1.外国人が中国の未解禁地域に位置する未開放の山峰に挑戦する申請を行うと同時に、参加人員の名簿、旅券番号、日程、入山路線などを提供すること。上記の書類が揃わなければ、許可申請に対処しません。
- 2.未解禁地域に位置する未開放の山峰の登山登録料金は、従来中国登山協会が公表した未踏峰のそれとは区別があります。中国登山協会は中国の政府関係部門の規定に基づいて登山登録料金を撤収する。
- 3.西藏東部は、中国自然保護地域になっています。今後、当該地域の入域は非常に難しくなります。

- (撮影、学術調査、記者等)。日本人登山者の当該地域の入域も半年前に申請書を提供すること。
- 4.上記事情の責任担当者は張江援、趙建軍です。

チベット隊、チョモランマに登頂

8月に開催される「少数民族運動会」の聖火をチョモランマ頂上で採火するためのチベット登山隊は、5月27日登頂に成功し採火を行った。登頂者は、次仁多吉、辺巴扎西、仁娜、阿克布、小羅則、加布、拉巴、扎西次仁と女性の桂桑、吉吉。

《タジキスタン》

イスモイル・ソモニの山頂に銘板を

旧ソ連の最高峰として知られていたコムニズム峰(7,495m)が改名され、新名の「イスモイル・ソモニ」と刻まれた銘板を山頂に設置する登山隊が、今夏(7月30日～8月20日)遠征することになった。

旧ソ連フルシチョフ政権下の1959年、コムニズム峰と名付けられた山は、現在タジキスタン共和国の領土。新名は、十世紀ころ中央アジアからイラン東部を支配したサーマーン朝の支配者の名前にちなんだ。

同峰が初めて測量されたのは30年代。その翌年には当時の支配者にちなんでスターリン峰と呼ばれたこともある。(1999.7.3 朝日新聞より)

トピックス

スペインで日本の登山報告書を求めています

スペインはバルセロナの北約25kmにあるサバテル市にある「山岳情報資料センター」では、日本隊のヒマラヤ登山隊の報告書の寄贈を望んでいます。

このたび同センターの25周年に招かれて「ヒマラヤ文献目録」について講演を行ってきた薬師義美氏の情報です。

なお、薬師氏によれば、同センターは、Josep Paytubi氏をチーフとする4人の私的な施設で、建物は市から中世の教会を無償貸与され、小さな

学校の体育館ぐらいのを改修して使用。蔵書1万冊、雑誌600点、地図3500枚、写真、スライド、ビデオテープなどが整然と整理されている由。しかも4人共本業があり、夜と休日しかオープンしていないとのこと。日本物では、山岳、山溪、岳人と薬師氏を送った物が若干あるとのこと。

そこで同センターは、日本のヒマラヤ登山隊の報告書を寄贈して欲しいとの希望があるとのこと。ちなみに10年ほど前からH A Jの報告書や「ヒマラヤ」も船便にて寄贈しています。

Servei General D'informacio de Muntaanya
Center de Documentacio Alpina

Apartat de Correus 330 E-08200 Sabadell
Spain

山岳4団体懇談会開れる

7月16日(金)東京・池袋で日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会の4団体の懇談会が開れた。これはH A Jの呼びかけで各団体の役員改選を期に三役の顔合わせを兼ねて意見交換を行った。当日は、日山協から坂口三郎会長、田中文男、山本久子両副会長、労山から吉尾弘会長、西本武志理事長、小野富美夫、小林孝雄、斉藤義孝各副理事長、野口信彦事務局長、J A Cから大森薫雄副会長、西村政晃常務理事、神崎忠男監事、H A Jから酒井國光会長、山森欣一理事長、八木原罔明、尾形好雄、岩崎洋、中川裕、野沢井歩各常務理事が出席した。

席上、各団体の概要の紹介があり、ヒマラヤ登山情報管理、山岳共済などが話題となった。

BOOKS

一期一会の山、人、本

昨年亡くなった一橋大学OB中島寛氏の遺稿集。随想には、エヴェレストやアンデスなど海外の山も有る。紀行も、ガンジャ・ラ、トロン・パスに加えて、ブラジルの山、ワイナ・ポトシ、キナバルなど。書評には、今西錦司「日本山岳研究」、ポニントン「ヒマラヤ冒険物語」、スコット「ヒマラヤン・クライマー」、田口二郎「東西登山史

考」など、論考・翻訳・座談には、「『世界百名山』の選定に加わって」など。追想として吉沢一郎、田口二郎、甘利仁郎氏らを偲んだ追悼文がある。巻頭に最後の山として有明山を登った紀行がある。癌告知を受けた翌々日に登山した際のものであるが、どのような心情であったのか。どの文章も読み易く感じられた。(山森)

A 5変形判 438頁 カラー5頁

寧金抗沙峰

1997年夏にH A Jが派遣したサマー・キャンプ隊の登山報告書。入山後5名がラサに下山した。その内の1名は登頂し、1名は帰国した。不揃いで大量のメンバーが短期間で七千メートルに登頂することが、いかに大変であるかを思い知らされる。隊員の雑記がその辺を物語っている。

B 5判 64頁 カラー2頁 1999年6月20日刊
1,600円 送料210円 申し込み先、H A J

明治大学マナスル・アンナ プルナI峰登山隊報告書

明治大学山岳部炉辺会が、1997年秋にマナスル、冬にアンナプルナIに派遣した登山隊の報告書。

マナスルは、同時期に数隊が入山しているが、それぞれが苦戦を強いられている中で成功であっただけに誇ってよいものがあるだろう。マナスルのように人気のある山では、BC付近を中心とした環境汚染が気になるところである。この点について報告がないのが惜まれる。

アンナプルナについては、隊長の報告にあるように(言い表わすことのできないプレッシャー)と、(マナスルで大活躍した高橋が、5,000mそこで肺水腫になるといった事態を誰が予測しただろうか?)の二つの感想に高所登山の難しさが語られていると言えよう。高所登山は、まだまだ冒険の世界であり、今、流行の高所遠足がどのように繁盛しようとも、冒険を實踐できる世界がヒマラヤの高所には残されているのである。

(記 山森)

B 5判 132頁 (内カラー8頁)

北海道山岳

日本山岳会北海道支部が創立30周年記念誌として刊行したもの。1979年北海道山岳連盟によるプマリキッシュ初登頂、1997年札幌山岳会によるミニヤコンカ日本人初登頂、1995年日大隊に同行してチョモランマの撮影を行ったNHK清水義浩氏の撮影記がある。又、大内倫文氏が北海道の海外登山の歩みを纏めている。

A 5判 161頁 価格1,500円

札幌市中央区南8西8文昌堂書店

☎011-511-9371 FAX011-511-9855

ヒマラヤから

K 2 便り

現在我々は、パキスタンのイスラマバードに滞在して物資の調達、スタッフとの打合わせ、あいさつ回りなどで動き回っています。

明日はバスをチャーターして登山基地のスカルドへ移動します。この地は太陽が高く、暑く乾燥しています。カレーは美味です。皆様に宜しくお伝え下さい。

G A C K 2 E x P 1999 5 / 19 須藤

ストック・カンリ便り

この度のモネージュ登山隊にご協力を賜りありがとうございました。デリー到着後、IMF日本大使館へのあいさつを済せ、28日レーに着きました。レーは、インドとパキスタンの国境問題があるとは思えない程静かです。しかし、一点の曇りもないという訳にもいきませんが、明日を信じ最善の努力をしたいと思っております。全員無事で帰国報告ができることを楽しみにしております。

グループ・ド・モネージュ ストックカンリ隊
象川 章

キンヤン便り

梅雨の影響はいかがでしょうか。登山隊の方ですが、

6 / 15 フンザ(ジープ)→フロー(ポーター雇用)

16日 フローからポーター約50名でキャラバンスタート→ヒスパール村

23~24 途中で高所順応を済ませ、23日、24日にかけて予定していた4,300m地点、キンヤン・キッシュのふもとにBCを設営。その後、3日間はBCの整理と休養。

27日 登山開始し、C1地点到達。

28日 C1とC2予定地間が雪壁になっており、ルート工作に日数がかかると予想されていたので、C1~C2の中間の雪壁の下に中継キャンプを設けるための地点到達。

7月1日~2日 雪壁帯に15本のロープを固定し、C2地点付近までルート工作。(飛田、田村、寺沢全員で行う。)

3日 中継キャンプからBCへ下山。

4日 BCで休養。

天気ですがBCに入った翌日から連日好天。3日BCに戻った午後頃から曇りだし、今日はアラレ、小雪そして太陽が時々顔を出すといった悪天に入っています。天気のパターンが前回(96年)と違い、私達には良い方向の様です。積雪は96年に比較してかなり少なく、雪の状態は良いのですが反面氷が出て、クレヴァスが広がっている様で地球温暖化の影響なのかとも思っています。

登山もこれから中段に入りますが、より高度の高い所で行動することをふまえ、隊員3名、高所ポーター2名も含め、皆、事故には一層の配慮をしながら行動をしたいと思っております。よく食べよく寝、元気にやっております。

キンヤンBCにて 1999.7.5 飛田和夫

東京集会のお知らせ

日 時	8月30日(月)午後7時~
内 容	暑気払いです。
場 所	HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

西蔵登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

- 1) チョモランマ (Qomolangma) 8,848m & チャンツェ (Zhangzi) 7,553m
1. チョモランマに立つ (日本山岳隊・エベレスト中国ルート激闘全記録) 読売新聞社 昭和55年6月25日 1,000円
2. チョモランマ・チベット (日本山岳会珠穆朗瑪登山隊公式報告) 講談社 昭和56年11月10日 5,400円
3. 珠穆朗瑪登山1980 (北壁及び北東稜の登攀) 「山岳75年」日本山岳会 1980年12月1日 3,500円
4. みんなが頂上にいた (岡島成行) 山と溪谷社 1983年2月1日 1,900円
5. 雪煙をめざして (加藤保男) 中央公論社 昭和57年11月15日 1,200円
6. 果てしなき山行 (尾崎隆) 中央公論社 昭和58年7月20日 1,200円
7. チョモランマ峰・美しい女神 (王富州) 「月刊 人民中国」1982年6月号 200円
8. 珠穆朗瑪峰 (1979年チョモランマ偵察隊) 横山宏太郎「岳人393号」1980年3月号
9. 珠穆朗瑪峰登頂成功 (江本嘉伸) 「山と溪谷513号」1980年8月号
10. レポート「チョモランマ」編集部「岩と雪77号」昭和55年10月
11. 絶頂への道・チョモランマ単独無酸素登頂 (ラインホルト・メスナー) 「山と溪谷520号」1981年1月号
12. エベレストに秘められた (ラルフ・パーカー) 「山と溪谷522号&523号」1981年3&4月号
13. チベット北壁隊・苦闘の90日 (カモシカ同人) 「山と溪谷571号」1984年4月号
14. チョモランマ北壁への戦い 上・下 (長谷川昌美) 「山と溪谷599&600号」1985年12月号 & 1986年1月号
15. 冬季・チョモランマ北壁 (Topics) 「山と溪谷598号」1985年12月号
16. チョモランマ単独行 (ラインホルト・メスナー) 山と溪谷社 1985年4月10日 2,200円
17. エベレスト物語「岩と雪97号」昭和58年8月号
18. カモシカ同人隊、チョモランマ北壁撤退「山と溪谷602号」1986年3月号
19. 魔頂チョモランマ (今井通子) 朝日新聞社 1986年8月 1,300円
20. 東北東稜に挑んだダグ・スコット隊 (湊周介) 「岳人487号」1988年1月号
21. チベット友誼の華長存-1986年チャンツェ峰合同登山研修隊報告書- (第6次日中合同登山技術研修会) 1986年8月24日
22. チョモランマ北峰・章子峰登頂 (日本中国合同登山研修隊) 「岳人471号」1986年9月号
23. 端午の節句にエベレスト山頂で握手「岳人488号」1988年2月号
24. 冬のチョモランマの咆哮 (長谷川恒男) 「山と溪谷634号」1988年5月号
25. チョモランマ交差縦走に成功「岳人492号」1988年6月号
26. ドキュメント・チョモランマ、5月5日 (神長幹雄) 「山と溪谷637号」1988年8月号
27. 大量12人が山頂に立つ (岡島成行) 「岳人493号」1988年7月号
28. 中国・日本・ネパール三国合同チョモランマ交差縦走1&2 (中国登山協会) 「岳人496号&497号」1988年10月&11月号
29. 中・日・ネ三国友好登山隊 (大塚博美) 「山岳第83年」日本山岳会 1988年12月20日
30. チョモランマ峰西稜 (1987年秋) 川上隆「山岳第83年」日本山岳会 3,500円
31. 踏跡第7号 (防衛大学校山岳会珠穆朗瑪峰登山報告) 防衛大学山岳会 昭和63年9月
32. 第三の女神 (松本圭一) 1989年6月

33. チョモランマ見果てぬ夢 (長谷川恒男) 「山と溪谷644号」1989年3月号
34. 珠穆朗瑪峰登山計画「ヒマラヤ213号」1989年8月号
35. チョモランマ北壁 (H A J 珠穆朗瑪峰登山隊) 「ヒマラヤ218号」1990年1月号
36. チョモランマ峰カンシュンリッジ (平野真一) 「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月7日 3,500円
37. ふたりのチョモランマ (貫田宗男) 「山岳第86年」日本山岳会 同前
38. チョモランマ・サガルマタ1988 (中国・日本・ネパール1988年チョモランマ・サガルマタ友好登山隊) 読売新聞社 1989, 5 5,150円
39. 禁じられた岩壁 エヴェレスト東壁新ルートの記録1988年「ヒマラヤ219号」1990年2月
40. チョモランマ/サガルマタ友好登山隊報告書 (日本山岳会) 1990/5
41. たったふたりのチョモランマ (貫田宗男) 「山と溪谷674号」1991年9月号
42. 生と死のはざまに立ったたった2人のチョモランマ「岳人543号」1991年9月号
43. エヴェレスト最後の課題・未踏のカンシュン稜に挑む「世界最高峰の知られざる顔 (明治大学チョモランマ遠征隊)」「岳人545号」1991年11月号
44. 二人のチョモランマ (貫田宗男) 山と溪谷社 1992年2月 1,500円
45. 日本・カザフスタン友好チョモランマ登山報告 (同登山隊) 1993年2月20日
46. エヴェレスト北東稜 (もうひとつの報告) 「岩と雪158号」1993年6月号
47. チョモランマ北東稜 (大宮求) 「山岳第88年」日本山岳会 1993年12月4日
48. エヴェレスト初登頂40周年「岩と雪158号」1993年6月号
49. もう一つのエヴェレスト、チョモランマトラバース「ヒマラヤ262号」
50. エヴェレストが二メートル低くなった話 (木崎甲子郎) 「山601号」1995年6月号
51. 未踏の北東稜からエヴェレスト登頂!! (神崎忠男) 「山602号」1995年7月号
52. 日本大学エベレスト登山隊、未踏の北東稜から初登頂「山と溪谷720号」1995年7月号
53. エベレスト北東稜を初完登「岳人577号」1995年7月号
54. 日本大学山岳部隊未踏の北東稜からエベレストに登頂「山と溪谷721号」1995年8月号
55. タクティクスの勝利 (古野淳) 同上
56. より強く、より高く (アリソン・J・ハーグリーブス) 「山と溪谷722号」1995年9月号
57. 日本大学エベレスト登山隊 ピナクルを越えてー 仮報告書 (同隊)
58. 日本大学エベレスト登山隊・1995 北東稜登山報告書 (同隊) 1996年3月31日
59. 福岡珠穆朗瑪峰登山隊報告書 (同隊)
60. 珠穆朗瑪峰 (立正大学体育会山岳部)
61. 戸高夫妻のチョモランマ日誌 (戸高雅史・優美) 岳人609号 1998年3月号
62. 大地の女神 チョモランマとの邂逅 (戸高雅史) 山と溪谷752号 1998年3月号
63. チョモランマ98年5月 昭和山岳会エベレスト登山隊、日本勤労者山岳連盟チョモランマ登山隊の記録から「山と溪谷756号」1998年7月号
64. 世界の天辺の贅沢な思い (日本勤労者山岳連盟チョモランマ登山隊) 「岳人614号」1998年8月号
65. エベレストより高い山へ (昭和山岳会エベレスト登山隊) 「岳人614号」1998年8月号
66. 短期間に8人登頂の新記録 (チョモランマ登山報告①～③) [登山時報283号～285号] 1998年9月号～11月号
67. 検証 高所登山成功へのプロセス (上村博道/山本正嘉) 「岳人618号」1998年12月号
- 2) マカルー (Makalu) 8,463m & チョモ・レンゾ (Chomo Lonzo) 7,790m
1. 天空にのびる長大な岩稜を目指して (山本宗彦) 「岳人572号」1995年2月号
2. マカルー峰東稜より登頂成功!! (重廣恒夫) 「山601号」1995年6月号
3. マカルー東稜・登頂記 (山本篤) 「山602号」1995年7月号
4. マカルー東稜に挑んだ日本山岳会隊、チベッ

- ト側新ルートから登頂成功 同上 95.8
- 5.マカルー東稜初登に成功「岳人577号」1995年7月号
 - 6.マカルー東稜初登の軌跡(山本宗彦)「岳人578号」1995年8月号
 - 7.マカルー登頂の報を聞いてー若い隊員の飛躍を確信してー(山田二郎)「山603号」1995年8月
 - 8.ヒマラヤに挑むー私の登山観ー(藤平正夫)「山605号」1995年10月号
 - 9.マカルー東稜(日本山岳会マカルー登山隊)1997年9月20日 山と溪谷社 4000円+税
 - 10.微笑んだ女神「チョモ・ロンゾ」立教大学「山と溪谷703号」1994年2月号
 - 11.手作りの立大隊、新ルートからチョモ・ロンゾ登頂(高橋克昌)「山と溪谷703号」1994年2月号
 - 12.烈風のチョモ・ロンゾ(武石浩明)「岩と雪164号」
 - 13.チョモロンゾ峰 中国側からの初登頂 立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊の記録(鯨坂青青)「山岳第89年」1994年12月3日刊
 - 14.白き咆哮(立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊1993年報告書)「同隊」1994年10月刊
 - 3) チョー・オユー(Cho Oyu) 8,201m、チョー・ウィ(Qowoyat) 7,354m、ラブチェ・カン(Labuche Kang) 7,367m、スークァンリ(Sigugag Ri) 7,308m、メンルンツェ(Menlungtse) 7,175m
 - 1.卓奥友峰登頂(張俊岩・成天亮)「ヒマラヤ177号」1986年8月号
 - 2.チョー・オユーの登頂と滑空(カモシカ同人)「岳人486号」1987年12月号
 - 3.私は登り、あなたは飛んだ(カモシカ同人)「岳人486号」1987年12月号
 - 4.チョー・オユーから飛ぶ(高橋和之)「クライミング・ジャーナル 33号」1988年1月号
 - 5.チョー・オユー1985(三谷統一郎)「山岳第81年」日本山岳会 1986年12月20日
 - 6.チョー・オユーのパラグライダー・フライト(高橋和之)「山と溪谷629号」1987年12月号
 - 7.ヒマラヤを翔ぶ チョー・オユー8,201m(高橋和之/今井通子) 未来社 1,800円 1988年8月
 - 8.8,000m峰14座完登を目指す山田隊(日本ヒマラヤ協会チベット登山隊)「岳人500号」
 - 9.2つの8,000m峰連続登頂計画「ヒマラヤ204号」1988年11月号
 - 10.8千米峰連続登頂ーシシャパンマ、チョー・オユーー「ヒマラヤ208号」1989年3月号
 - 11.チョー・オユーとシシャパンマ(ヴォイチュエフ・クルティカ)「岩と雪145号」1991年4月
 - 12.チョー・オユー峰登頂(芳賀孝郎)「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
 - 13.8,000mの女神の峰へ(永田秀樹)「岳人517号」1990年7月号
 - 14.幾つになっても登りたい シルバータートルのチョー・オユー(渡辺玉枝/遠藤京子) G「岳人535号」1992年1月号
 - 15.50歳以上のチョー・オユーの登頂(池田錦重)「山岳第87年」日本山岳会
 - 16.50歳の8,000m峰チョー・オユー無酸素挑戦記(近藤和美)「登山時報217号~218号」1993年3月~4月
 - 17.チョー・オユー峰登頂1991(石川富康)「東海山岳No.6」1994年2月
 - 18.チョー・オユー峰~2つのビッククライミング(遠藤由加/山野井泰史)「岳人570号」1994年12月号
 - 19.ふたりのチョー・オユー南西壁(長尾妙子+遠藤由加)「山と溪谷713号」1994年12月号
 - 20.チョー・オユー南西壁に単独で新ルート開拓8,000メートル孤独の闘い(山野井泰史)「山と溪谷714号」1995年1月号
 - 21.チョー・オユー アルパイン・スタイル(山野井泰史+長尾妙子+遠藤由加)「岩と雪168号」1995年2月号
 - 22.チョー・オユー登山(深瀬一男)「山597号」1995年2月号
 - 23.運動生理学の成果と陥穽(日本チョー・オユー学術登山隊・山本正嘉)「山と溪谷721号」
 - 24.8千メートル峰、登山タクティクス解明への試み(山本正嘉)「岳人578号」1995年8月号
 - 25.秋田から8千米峰へ チョー・オユー峰(秋

- 田チャー・オユー登山隊1995) 1995年11月
26. チャー・オユー全員登頂(上)(下)(佐藤信二)「登山時報259号~260号」1996年9月号~10月号
 27. 8,201mの頂きに8人全員立った(札幌中央勤労者山岳会)
 28. チャー・オユー峰(8,201m)登頂報告(泉州山岳会葛城特別号)1997.7~10
 29. 拉普契干峰偵察報告「ヒマラヤ181号」1986年12月号
 30. 日中友好ラブチェ・カン峰合同登山計画「ヒマラヤ190号」1987年9月号
 31. ラブチェ・カン初登頂「ヒマラヤ194号」1988年1月号
 32. 15人のサミッター(山森欣一)「山と溪谷630号」1988年1月号
 33. ラブチェ・カン初登頂「岳人488号」1988年2月号
 34. 友好の白き頂ラブチェ・カン(日本ヒマラヤ協会)1988年4月
 35. ラブチェ・カンII(7,072m)初登頂-1995年スイス隊の記録-「ヒマラヤ294号」1996年5月号
 36. 喬烏衣登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
 37. 喬烏衣登山報告「ヒマラヤ182号」1987年1月号
 38. 端正な未踏峰チャー・ウィ登頂(日本ヒマラヤ協会隊)「岳人476号」1987年2月号
 39. 喬烏衣登山報告書(日本ヒマラヤ協会チャー・アウイ登山隊1986年実行委員会)1986年11月15日
 40. 喬烏衣峰7,354m(日本ヒマラヤ協会、チャー・アウイ登山実行委員会)1987年7月
 41. 四光峰の風-チベットの白き頂きに立つ-(大阪市立大学日中友好学術登山隊)1990年7月
 42. 秘峰[メンルンツェ]初登頂(アンドレイ・シュトレムフェリ)「岩と雪157号」1993年4月号
 - 4) シシャパンマ(Xixabangma) 8,027m & ポロン・リ(Porong Ri) 7,292m、カン・ベン・チン(Can Ben Chen) 7,281m、リスム(Risum) 7,050m
 1. シシャパンマ1981年・春(日本女子登山隊の記録)女子登攀クラブ1981年9月2,200円
 2. 女たちの山(シシャパンマに挑んだ9人の決算)落合誓子 山と溪谷社 昭和57年12月10日 980円
 3. シシャパンマ峰・氷美の世界(張俊岩)「月刊人民中国」1983年1月号
 4. 女だけのシシャパンマ(北村節子)「山と溪谷521号」1981年2月号
 5. 手記・私ひとりのシシャパンマ(田部井淳子)「山と溪谷531号」1981年8月号
 6. 麗峰シシャパンマに立つ(北村節子)「山と溪谷531号」1981年8月号
 7. 改造人間シシャパンマと戦う(悪天に阻まれた速攻登山)原真「岳人427号」1983年1月号
 8. ドキュメント「速攻登山」(加藤幹敏・原真)「東京新聞出版局」1984年3月2,200円
 9. 現代ヒマラヤ登攀史(編集部)「岩と雪111号」昭和60年8月号
 10. チャー・オユーとシシャパンマ(ヴォイチェフ・クルティカ)「岩と雪145号」同前
 11. 60歳の8千メートル峰登頂記(中島道郎)「山544号」1990.11.20
 12. 毎日新聞、8千メートル峰「無酸素」登頂の報道記事に思う(中島道郎)「山545号」1990年11月号
 13. 還暦男二人、八千米峰に登るの記(中島道郎)「山岳第85年」日本山岳会 1990年12月 3,500円
 14. 京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊(シシャパンマ隊)報告(松沢哲郎)「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
 15. 遠き嶺シシャパンマ(長野県山岳協会創立30周年記念登山隊)1992年9月
 16. 福岡支部創立35周年シシャパンマ隊報告(日野悦郎)「山岳87年」日本山岳会 1992年12月5日
 17. 希夏邦馬峰 立正大学山岳部 1993年3月
 18. 50歳の8,000m峰シシャパンマ無酸素挑戦記

- (近藤和美)「登山時報219号」1993年5月号
19. シシャパンマ登頂1989 (湯浅道男)「東海山岳No.6」1994年2月1日
 20. 女たちの地球山旅 秘境シシャパンマへの凱旋」(北村節子)「岳人556号」1993年10月号
 21. イェジ・ククチカ残されたシシャパンマに西稜から登頂 (坂下直枝)「山と溪谷629号」1987
 22. XIXABANGMA 1980年プレ・モンスーン西ドイツ隊の記録「岩と雪83号」1981年8月
 23. 遥かなるチベット 希夏邦瑪峰登頂 (愛知学院大学山岳会) 1990年2月
 24. 雪豹同人シシャパンマ登山報告 (日本勤労者山岳連盟)
 25. シシャパンマ登頂レポート1~5 (労山・雪豹同人希夏邦瑪峰登山隊「登山時報239号~243号」1995年1月号~5月号
 26. 再起の山 シシャパンマ (小西政雄×松田宏也)「山と溪谷725号」1995年12月号
 27. 安堵、そして充実のとき (松田宏也)「岳人582号」1995年12月号
 28. シシャパンマ 1995年秋シシャパンマ峰登山報告書 (Y.M.S タートル倶楽部) 1996年2月刊
 29. Der Bergmorgen 3号 (故 和田実君追悼号Porong Ri報告) 大分R.C.C 昭和58年5月17日
 30. ポーロン・リ登頂 (梅木秀徳「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月 3,000円
 31. チベット高原学術登山隊1982概要報告書 京都大学学士山岳会
 32. カンペンチン (森本陸世)「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月 3,000円
 33. チベット旅情 (カンペンチン初登頂) 齊藤清明 芙蓉書房 昭和58年7月15日 1,500円
 34. チベットをゆく京都大学学士山岳会 (カンペンチン登頂と学術調査82,3~5) レポーター 永田秀樹「岳人421号」1982年7月号
 35. 未踏峰「発見・消失・再発見」の顛末〈リスマ登山学校〉 (近藤和美)「登山時報266号」1997年4月号
 36. リスマ峰初登頂報告 (上) (下) (近藤和美)
 - 「登山時報270号~271号」1997年9月号~10月号
 37. ささやかな初登頂リスマ峰 (近藤和美)「岳人602号」1997年8月号
 38. 芷拉 STEI'96報告書 (滋賀県高等学校体育連盟登山部) 1997年3月31日
 - 5) ナムチャ・バルワ (Namcha Barwa) 7,782 m & ギャラ・ベリ (Gyala Peri) 7,294 m
 1. ナムチャバルワ (水野勉)「ヒマラヤ128号」1982年7月号
 2. ナムチャバルワ峰登頂を目指して (李舒平)「岳人451号」1985年1月号
 3. ナムチャバルワ (伊東享)「山と溪谷597号」1985年11月号
 4. 最高峰ナムチャバルワとヤル・ツァンポー大屈曲点周辺の山々 (山森欣一)「岳人464号」1986年2月号
 5. 東チベットの大湾曲部と幻の高峰 (山森欣一)「山と溪谷601号」1986年2月号
 6. ギャラ・ベリとナムチャバルワ (伊東享)「岳人464号」1986年2月号
 7. チベットの秘峰・南迦巴瓦峰 (王振華)「ヒマラヤ184号」1987年3月号
 8. ヤルツァンポー河大湾曲部調査 (楊逸疇、丘睦美訳)「ヒマラヤ94号」1979年9月号
 9. ナムチャ・バルワへの道1~3「ヒマラヤ224号~226号」1990年7月~9月号
 10. 神秘のグレート・ベンド ナムチャ・バルワ 日本ヒマラヤ協会 1991年1月1日
 11. ナムチャバルワ峰偵察隊第1~2報 (重廣恒夫)「山547&548」1991.1~2
 12. NAMCHA BARWA 鷹が両翼を広げたようにそそり立つ未踏の秘峰「岳人525号」
 13. 「ナムチャバルワ」いかにして登るか (和田城志)「岩と雪147号」1991年8月
 14. 幻の山 ナムチャバルワを飛ぶ (迫田泰敏)「山と溪谷675号」但し写真は裏焼き!
 15. ナムチャバルワ峰偵察報告 (重廣恒夫)「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
 16. ナムチャバルワ通信 (重廣恒夫)「山557~560号」1991.10~92.1
 17. 大鷹を思わずチベットの秘峰、ナムチャバル

- ワへの挑戦（日中合同登山隊）「岳人537号」
1992年3月号
18. 1991年ナムチャバルワ峰合同登山（重廣恒夫）
「山岳第87年」日本山岳会
 19. ナムチャバルワの気象（奥山巖）「山岳第87年」1992年12月5日
 20. チベットの秘峰ナムチャバルワ初登頂（日中ナムチャバルワ合同登山隊）「岳人548号」1993年2月号
 21. 日本・中国ナムチャバルワ合同登山「山岳第88年」日本山岳会 1993年12月
 22. ナムチャバルワ第六信～八信（重廣恒夫）
「山569～571号」1992年10月号～12月号
 23. ナムチャバルワ初登頂 読売新聞社 1994年10月30日刊 非売品
 24. 7,000mの未踏峰をめざして（ギャラ・ペリ偵察）「岳人463号」1986年1月号
 25. 秘峰ギャラ・ペリ偵察1985「ヒマラヤ170号」1986年1月号
 26. 謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ」（日本ヒマラヤ協会隊）「山と溪谷618号」1987年2月号
 27. 加拉白里登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
 28. 謎の河の白い頂（H A Jギャラ・ペリ登山隊）「ヒマラヤ183号」1987年2月号
 29. 謎の河の秘峰ギャラ・ペリ 日本ヒマラヤ協会 昭和62年9月1日
- 6) ナムナニ（Namunani）7,694 m & カン・リン・ポチェ（Kang Rimpoche）6,656 m
1. 納木那尼峰（日中友好納木那尼合同登山隊）「岳人447号」1984年9月号
 2. 西チベットの未踏峰ナムナニに照準「岳人447号」1984年9月号
 3. 風雪は人を磨く（李舒平）「岳人464号」1986年2月号
 4. 日中合同納木那尼峰先遣隊1984報告書 日中友好納木那尼峰合同登山隊
 5. ナムナニ（日中友好納木那尼峰合同登山隊）毎日新聞社 1986年6月 6,900円
 6. 聖山巡礼（玉村和彦）山と溪谷社 1987年5月 1,800円
7. 聖地巡礼とナムナニ峰偵察・1984年「年報・H I M A L A Y A 3月号」日本ヒマラヤ協会 1986年9月15日
 8. ナムナニ峰登頂（日本山岳会・福岡支部）1998年8月21日
 9. ナムナニ峰登頂と辺境の旅（浦一美）「山643号」1998年12月20日号
 10. チベット2座連続 カバン（6,717m）& ナムナニ（7,694m）登頂計画「ヒマラヤ333号」1999年8月号
 11. 未踏の山・辺境の山第5回「カイラス」（加藤洋）「岳人409号」1981年7月号
 12. 聖地巡礼カイラスの旅「ヒマラヤ155号」1984年10月号
 13. チャンタン高原から聖地巡礼の旅（山森欣一）「ヒマラヤ156号」1984年11月号
 14. 西藏・聖地カイラス巡礼（NHK取材班）日本放送出版協会 昭和60年6月1日 1,700円
 15. チャンタン高原と聖地巡礼（山森欣一）「岳人450号」1984年12月号
 16. 神の山 カイラス（五百沢智也）「山と溪谷583号」1985年1月号
 17. 聖なる山「カイラス」へ（貫田宗男）「山と溪谷624号」1987年7月号
 18. チベットの霊山 カイラス（足立隆）「岳人504号」1989年6月号
 19. 聖山「カン・リンポチェ」日本巡礼団の旅（桶川和気夫）「ヒマラヤ275号」1994年10月号
 20. グゲ王国とカイラス山、西ネパールの旅（永田秀樹）「岳人575号」1995年5月号
- 7) ガンカル・プンスム（7,570m）
1. 崗嘎普松峰偵察（伊丹紹泰）「山645号」1999年2月号
 2. ガンカー・プンスム峰登山隊計画延期の経緯について（大森薫雄）「山647号」1999年4月号
 3. 南側からの視点—ブータン・ヒマラヤ、中国・ブータン国境について—（吉永英明）「同上」
 4. 中国・チベットに聳える 未踏の世界最高峰ガンカー・プンスム峰（中村進）岳人620号 1999年2月

- 5.世界第二の未踏峰 リャンカンカンリに登頂
(中村進/小林尚礼) 山と溪谷769号 1999年
8月号
- 6.リャンカンカンリ初登頂(角谷道弘/小林尚
礼) 岳人626号 99年8月号
- 7.ガンカー峰とリャンカンカンリ峰を考える
(山森欣一)「ヒマラヤ332号」1999年7月号
- 8.ガンカープンスム峰周辺のブータン政府発行
の地図の考察(斎藤惇生)「山649号」1999年
6月号
- 8) クーラ・カンリ (Kula Kangri) 7,554m、
カルジャン (Karjiang) 7,216m
- 1.天帝の峰クーラ・カンリを目指して「長谷川
浩」「岳人464号」1986年2月号
- 2.微笑んだ「天帝の峰」クーラ・カンリ「山と
溪谷610号」1986年8月号
- 3.クーラ・カンリ初登頂—そして東チベットか
ら成都へ初横断—(神戸大学西藏学術登山隊)
「岳人472号」1986年10月号
- 4.クーラ・カンリ初登頂(平井一正)「山岳第
82年」日本山岳会 1987年12月20日 3,500円
- 5.天帝の峰に挑む(神戸大学西藏学術登山隊)
神戸新聞総合出版センター 1988年8月
3,500円
- 6.クーラ・カンリⅡ登山計画「ヒマラヤ304号」
1997年3月号
- 7.クーラ・カンリⅡ(7,418m)北面報告「ヒ
マラヤ310号」1997年9月号
- 8.神領の峰へ(HAJカルジャン登山隊)「ヒ
マラヤ179号」1986年10月号
- 9.烈風の頂へ—カ熱彊峰初登頂の記録—「ヒマ
ラヤ182号」1987年1月号
- 10.ブータン国境への旅 クーラ・カンリ南面を
見る(山森欣一)「ヒマラヤ309号」1997年8
月号
- 9) ヤンラ・カンリ (Yangra Kangri) 7,429m
&カバン (Kbang) 6,717m)
- 1.ガネッシュ・ヒマール北面(山森欣一)「山
と溪谷739号」1997年2月号
- 2.ヤンラ・カンリ偵察記(山森欣一)「ヒマラ
ヤ306号」1997年5月号
- 3.未踏の頂に撞れてカバン(6,717m) 偵察計
画「ヒマラヤ324号」1998年11月号
- 4.未踏の頂 カバン(6,717m) 偵察報告「ヒマ
ラヤ326号」1999年1月号
- 5.未踏の峰に撞れて(山森欣一)「山と溪谷763
号」1999年2月号
- 10) チョモラーリ (Qomo Lhari) 7,364m
- 1.綽莫拉利峰—チョモラーリ(張俊岩/福山信
訳)「ヒマラヤ184号」1987年3月号
- 2.曠野に座する仙女の峰「チョモラーリ」(東
野良)「山と溪谷725号」1995年12月号
- 3.女神の山 チョモラーリ(長野県山岳協会)
1996年11月25日
- 11) ニンチンカンサ (Ningchin Kangsha) 7,206
m&チョム・カンリ (Qumg Kangri) 7,048m
- 1.第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書 ニ
ンチンカンサ登山隊・東チベット踏査隊 19
85大分県山岳連盟(松元徹編)大分県山岳連
盟 1986年12月 1,800円
- 2.寧金抗沙峰(ニンチンカンサ)西面初登頂
仮報告書(栃木県高校体育連盟登山部)1995.
9
- 3.寧金抗沙峰合同登山隊1995年報告書(福岡大
学体育会山岳部/福岡大学山岳会)
- 4.輝ける白き峰 ニンチンカンサ西稜初登頂の
記録(栃木県高体連登山部)1996年3月30日
- 5.ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画(ヒ
マラヤ308号)1997年7月号
- 6.ニンチン・カンサ峰登頂「ヒマラヤ314号」
1998年1月号
- 7.ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画「ヒ
マラヤ319号」1998年6月号
- 8.ニンチン・カンサ(7,206m)西稜初登攀報
告「ヒマラヤ325号」1998年12月号
- 9.寧金抗沙峰(日本ヒマラヤ協会)1999年6月
20日
- 10.中央大学チョムカンリ登山隊1997 仮報告書
(同大学山岳部)1997年6月5日
- 11.チョム・カンリ(7,048m)登山計画「ヒマ
ラヤ333号」1999年8月号
- 12) ニエンチェンタンラ (Nyainqentanglha)
7,162m
- 1.東北大学日中友好西藏学術登山隊報告書(東

- 北大学日中友好西藏学術登山隊実行委員会)
1986年9月
2. チベット高原の盟主—ニエンチェンタングラ—東北大学山の会 1994年6月刊
 3. 未登峰ニエンチェンタングラIV峰に登頂成功 (藤田清)「登山時報250号」1995年12月号
 4. ぼくたちのヒマラヤ登山 ハイキングから未踏の7,000m峰ニエンチェンタングラへ (松葉桂二)「岳人582号」1995年12月
 5. 桑頂抗沙峰登山隊報告 (同隊) 1994年3月15日
 6. チャチャチョ 偵察6,447メートル (長野県山岳協会西藏東部登山隊)「山と溪谷709号」1994年8月号
 7. タンラ・ポ (6,394メートル) 登頂 (中央大学学友会体育連盟山岳部)「岳人576号」1995年6月
 8. 現役大学生主体で登ったチベットの未踏峰タンラ・ポ (黒川恵)「山と溪谷720号」1995年7月号
 9. タンラ・ポ峰初登頂報告書 (中央大学山岳部) 1995年6月22日
 10. 未踏の白き頂を目指して (中津川勤労者山岳会) 1996年11月20日
 11. OHTE'95登山報告書 (1995年大阪府高校生日中友好登山隊) 1996年7月25日
 12. 念青唐古拉山脈の無名峰を目指して (興田勝幸)「登山月報355号」平成10年10月号
 13. チベット無名峰へ (日本教員登山隊)
 - 13) ルンポ・カンリ (Loinbo Kangri) 7,095m
 1. チベットの未踏峰、ルンポ・カンリ登山計画「ヒマラヤ270号」
 2. ルンポの神を仰ぎて (八嶋寛)「ヒマラヤ274号」
 3. ルンポ・カンリ試登7,095メートル (日本ヒマラヤ協会ルンポ・カンリ登山隊)「山と溪谷709号」1994年8月号
 4. ルンポ・カンリーチベットの未踏峰・7,095m。1994年試登の記録— (日本ヒマラヤ協会) 95, 4
 - 14) カント (Kangto) 7,060m
 1. カント峰に賭けた同志社大学の山男「岳人493号」1988年7月号
 2. 遥か久恋の峰 (同志社大学カント峰登山隊) 毎日新聞社 1989年7月20日 6,180円
 - 15) カンリ・ガルポ山群
 1. 崗日嘎布山群から察隅地方へ (中村保)「ヒマラヤ296号」1996年7月号
 2. ヒマラヤの東 (中村保) 1996年3月15日 山と溪谷社 3,000円
 3. 横断山脈の未踏の山々 (中村保)「岳人597号」1997年3月号
 - (その他)
 1. 中国の山へのアプローチ (阿部淳)「ヒマラヤ104号」1980年6月号
 2. 中国登山レギュレーション全文対訳「岩と雪75号」1980年6月
 3. 開かれた中国の高峰「岳人400号」1980年10月号
 4. 中国の高峰 中国登山協会監修 東京新聞出版局 昭和56年1月29日 2,000円
 5. チベットの旅 (中国人民美術出版社編) 美乃美 1981年5月20日 1,500円
 6. 中国にくる外国の登山団体・登山旅行団の費用徴収についての規則「岳人409号」1981年7月号
 7. 中国登山ハンドブック (未知、秘境、未踏の山総ガイド) 上越山岳協会 ベースボールマガジン社 1981年12月20日 1,800円
 8. 進む中国奥地の山岳研究 (渡辺義一郎)「岳人415号」1982年1月号
 9. チベット南東部の氷河 (鄭本興)「岩と雪80号」1982年4月号
 10. チベット研究文献目録「日本文・中国文篇」1887年～1997年 (貞兼稜子編) 亜細亜大学アジア研究所 昭和57年4月10日 6,500円
 11. 世界のアルピニストがねらう中国の山々 (王鳳桐)「月刊 人民中国」1982年5月号
 12. 写真集 チベット (ユーゴスラヴィア・レビュー社/中国上海美術出版社) ベースボールマガジン社 1982年 9,800円
 13. チベット (篠山紀信) 朝日新聞社 1982年 6,000円
 14. 入蔵日誌 (矢島保治郎) チベット文化研究所

- 1983年1月22日 1,800円
15. 東チベット紀行 (ドウオグ村の人とその暮らし) 江本嘉伸「山と溪谷560号」1983年7月号
 16. これからの中国登山「ヒマラヤ142号」1983年9月号
 17. 中国登山研究「ヒマラヤ142号」1983年9月号
 18. 中国登山協会一行来日「岩と雪98号」83年10月
 19. チベットおよびその付近の山々 (フランク・ブースマン/水野勉・訳)「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月1日 3,500円
 20. ヒマラヤ文献目録 (薬師義美編) 白水社 1984年1月25日 19,000円
 21. ルンタの秘境 (江本嘉伸) 光文社 1984年4月30日 980円
 22. チベット滞在記 (多田等観・牧野文子編) 白水社 1984年 1,800円
 23. 氷山雪嶺二千年 (周正) 譚佐強/田川常雄・訳 ベースボールマガジン社 1985年3月10日 2,200円
 24. 中国西域紀行 (風見武秀)「岳人460号」1985年10月号
 25. 初のヒマラヤ横断1,000km (山里寿男)「岳人461号」1985年11月号
 26. ラサへのあこがれ (D.レイフィールド、水野勉訳) 日本山書の会 1985年11月 4,500円
 27. 天上の道—憧憬のラサヘ (トーマス・レイヤード)「山と溪谷597号」1985年11月号
 28. チベットおよびその付近の山々補遺 (水野勉)「山岳第80年」日本山岳会 1985年12月20日 3,500円
 29. ヒマラヤ文献消遥 (水野勉) 鹿鳴荘 1986年3月 18,000円
 30. 中国登山研究会 (日本ヒマラヤ協会)「ヒマラヤ174号」1986年5月号
 31. 中国登山の和文参考資料一覧 (日本ヒマラヤ協会)「ヒマラヤ175号」1986年6月号
 32. 世界無銭旅行者・矢島保治郎 (浅田晃彦) 筑摩書房 1986年6月 1,600円
 33. 東チベット紀行 (E・タイクマン、水野勉訳) 白水社 1986年7月5日 2,200円
 34. 躍進するチベット登山協会 (山森欣一)「ヒマラヤ176号」1986年7月号
 35. 女性大使チベットを行く (劉曼卿著/岡崎俊夫・松枝茂夫共訳) 白水社 1986年8月30日 2,200円
 36. 憧憬の中国、西遊の7,000km「山と溪谷611号」1986年9月号
 37. 中国登山研究会「ヒマラヤ184号」1987年3月号 500円
 38. 中国の費用撤収規定 (1987年1月発効)「ヒマラヤ186号」1987年5月号
 39. チベット自転車行 (九里徳泰)「ヒマラヤ190号」1987年9月号
 40. 中国大陸・下巻 天壤無限 (白川義員) 小学館 28,000円
 41. チベットのお正月 (藤田弘基)「岳人487号」1988年1月号
 42. チベット走破5,000キロ (九里徳泰)「山と溪谷631号」1988年2月号
 43. 東ヒマラヤ探検の歴史 (上) 東チベットとビルマ北部の山々 (金子民雄)「岳人488号」1988年2月号
 44. 東ヒマラヤ探検の歴史 (中) ベイリー、ウォードらの探検 (金子民雄)「岳人489号」1988年3月号
 45. 厳寒の友好道路走破 (小林憲生)「山と溪谷632号」1988年3月号
 46. エベレスト、マカルーを飛ぶ (岡島成行)「山と溪谷633号」1988年4月号
 47. チベットのファッション (藤田弘基)「岳人490号」1988年4月号
 48. 東チベット横断紀行 (朝日教之) 山と溪谷社 1988年10月 1,600円
 49. T I B E T 失われた魂・チベット (遠藤正雄) 時事通信社 1989年5月 2,370円
 50. ラサに厳戒令敷かれる— (江本嘉伸)「山と溪谷646号」1989年5月号
 51. チベット高原自転車ひとり旅 (九里徳泰) 山と溪谷社 1989年11月 1,600円
 52. 中国登山の手引き・初版 (山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1990年3月31日 3,000円

- 53.長寿と叡智をもたらす聖なる山の偉大な河
「ヤル・ツァンポー」(ギャロル・ダナム)
「山と溪谷666号」1991年1月号
- 54.西藏漂泊 チベットに魅せられた10人の日本人(江本嘉伸)「山と溪谷666号〜」 1991年2月
- 55.世界の屋根を逍遙 夢のチベット・トレッキング(クリスティナ・フォン・ディットフルト)「山と溪谷678号」1992年2月
- 56.中国登山の手引き・第二版(山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1992年4月22日 3,000円
- 57.チョモランマ・カンシュン谷周辺の地形(明治大学チョモランマ峰遠征隊・学術班) 93年11月
- 58.西藏漂泊(江本嘉伸) 山と溪谷社(上) 2,800円 (下) 3,000円
- 59.エヴェレスト 1921年、1922年(ジョージ・リー・マロリー/田中純夫訳) 日本山岳会 越支部 1994年8月刊
- 60.中国登山の手引き・第三版(山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1994年3月18日 3,500円
- 61.チベット紀行(帝塚山学院チベット踏面隊)「岳人571号」1995年1月号
- 62.世界の山々(アジア・アフリカ・オセアニア編) 古今書院 1995年9月2日 2,800円
- 63.青いケシの国からチベットへ(盛田武士)「岳人586号」1996年4月号
- 64.中国の手引き・第四版(山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1996年5月15日 3,500円
- 65.チベット高原走破の旅(竹内哲夫)「山619号」1996年12月号
- 中国登山20年(山森欣一)「ヒマラヤ328号」1999年3月号
- メコン、サルウィン分水峰の山と谷(中村保)「山と溪谷765号」1999年4月号
- 伝説の登山家G・マロリー(江本嘉伸)「岳人625号」1999年7月号
- 雲南・西藏横断4,000km(鎌澤久也)「山と溪谷742号」1997年5月号

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年	特集
★ 1月号	雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳を登る
2月号	再発見・八ヶ岳 森の逍遙から氷瀑まで
★ 3月号	魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰
4月号	残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて
★ 5月号	新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山
6月号	南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ
★ 7月号	花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊
8月号	幽遠の黒部溪谷、岩壁、源流、高原へ
9月号	森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高
★ 10月号	南会津と奥美濃、山里の魅力も探る
11月号	秋深い奥秩父と西上州 その山と人
12月号	岩と雪の殿堂・剣岳と立山連峰へ

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
東京本社 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

■ 寸 感 ■

薬師義美氏からスペインの件で来信があり驚いた。件のS.P氏とは10年程前から交流があり、本会の出版物のほとんど全てを贈ったし、毎月の機関誌も届けている。S.P氏からは、この数年スペインの8千メートル登頂者の記録が送付されて来ており、勿論、私の整理した日本人のそれを送っている。それにしても、個人の力でこれほどのことが出来るのはやはり文化の違いなのであろうか。垣根をとり払わなければならない分野が多い。(山)

事 務 局 日 誌 (7月)

- 1日(木) 東海大 出利葉氏と協議
- 2日(金) チベット連続隊ビザ申請
- 6日(火) 西田敏行氏実父葬儀(山森、八木原)
リャンカンカンリ登山隊報告会(於明大、山森、八木原)
- 9日(金) ヒマラヤNo.333号発送
- 10日(土) 合同家族会&合同壮行会(かんぼヘルスプラザ東京、壮行会150名)

- 13日(火) 新疆登山協会からアルタイ隊情報
- 15日(木) CMAから東海大の件、FAX有り
- 16日(金) 山岳4団体懇談会(於、高松)
CMAから「日中登山交流20周年記念会&トレッキング」FAX届く。
- 20日(火) チョム・カンリ登山隊8名出発
- 24日(土) アルタイ隊7名出発
- 25日(日) 故小林勉前都岳連会長追悼会(山森)
- 26日(月) 東京集会(6名)

ヒマラヤ No.334 (9月号)

平成11年8月10日印刷 11年9月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

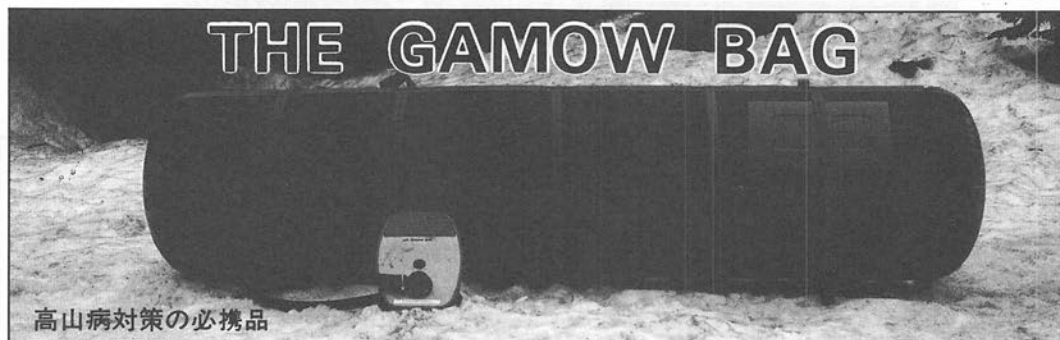
発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



Royal Nepal Airlines

The way to Nepal ロイヤル・ネパール航空旅客代理店



SINCE 10th Dec. 1973

株式会社 **西遊旅行**

25 years with
exciting countries

SAIYU TRAVEL CO., LTD.

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707, 224248

●格安航空券はこちら！



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.gol.com/saiyu/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店 / 〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004